

# 会報

第 73 号 (2026/2/24)

〒720-0082  
 広島県福山市木之庄町 4-3-14  
 Tel&Fax 084-917-5837  
 Mail  
 h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



Community Renaissance  
 Research Center

## 新しい年への思いを込めて

副代表理事 加納三千子

戦後 80 年を迎えた昨年の安川代表の年頭の挨拶には、空襲の体験を書かれていました。日本の被爆者団体の活動にノーベル平和賞が贈られ、女性総理も誕生したにもかかわらず、日本の閣僚の一部には『日本も核武装を』と言う発言まで出てきています。

私は原爆も空襲も具体的な記憶はありません。しかし子どもの時からサイレンの音と飛行機の音が苦手でした。これらの音を聞くと、おなかの調子が悪くなっていました。

少し大きくなって、なぜサイレンや飛行機の音が嫌なのかを考えてみました。すると、サイレンや飛行機の音がすると、あわてた母がおしめを持ち、私を抱えて防空壕に入っていたのだと気がつきました。そのときの母はとても慌てていたと思います。そうした母親を見て、赤ちゃんであった私はとても不安な気持ちになっていたと思います。それで、サイレンや飛行機の音を聞くと条件反射のようにおなかの調子がおかしくなっていたのだろうな、と思いました。

また、1958 年中学 2 年生の時、遠足として広島復興博覧会に行きました。そもそも遠足とは読んで字のごとく遠くに足を運ぶ、と言うことです。それまでは足で歩くだけでしたが、この年はバスでの初めての遠足でした。その日、朝は雨が降っていた、平和公園はまるで田植え前の田んぼのような状態でした。資料館の建物が出来ていたのも覚えていますが、被爆に関する展示は記憶にありません。復興博で記憶に残っているのはマジックハンドのことだけでした。隣の部屋からマジックハンドを使って危険物処理する動き等が珍しくて面白かったので記憶に残ったのかな、とズツーと思っていました。

しかし五年前、岩波新書の『広島平和記念資料館は問いかける』という本を手に取りました。著者は前平和資料館の志賀賢治館長でした。その中に 1958 の復興博覧会のことを書いてありました。私が被曝状況の展示を覚えていなかったのではなく、広島県や広島市から被曝状況の展示をしてはならない、と指示が出ていたことが分かりました。核による被害のことを述べずに、原子力の平和利用を前面に出したのだろうと思います。広島は平和都市と言いつつ、いまの広島市長が「教育勅語」を職員の研修に使い、『はだしのゲン』を平和教育の副読本からはずすなど、被爆者の思いに逆行している状況が気になります。

最近「太平洋戦争前の状況に似てきている」という言葉をよく聞くようになりました。私の同級生には父親が戦死した人も沢山いました。また、私の友人も父親は原爆による戦死。しかし、戦後にお母さんが「再婚したい」と言ったのに反対した

ことを、いまだにそれを悔やんでいます。これからの子どもたちが、二度とその様な思いをすることがないような社会に、と思っています。

### 今後の予定

#### ジェントロジー研究会

3月13日(金) 14時〜

場所：ルネッサンス研究所  
 参加費：3000円

内容：『老後ひとり難民』23 ページから。参加者は少ないのですが、毎回各々が現在直面している高齢問題をどう考えるか、の話で盛り上がっています。

#### 「ケアの社会学」を読む会

3月12日(木) 16時半〜

場所：ルネッサンス研究所  
 参加費：3000円  
 読む本：上野千鶴子著『ケアの社会学』  
 内容：「第12章：ケアに根拠はあるか」  
 (P. 302 から)

#### 春の歌を届けます♪

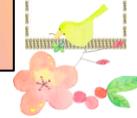
三月の『コミュニティカフェ仁伍』は音楽に触れる機会「歳を取るほど大胆になるわ」を用意しています。皆様たくさんのご参加をお待ちしています。

今号の内容

- ・ お正月の小物づくり
- ・ おしゃれを楽しむ
- ・ 味噌作り
- ・ ケアを通じた贈り物
- ・ 高齢者の「孤独・孤立対策」今とは?
- ・ 講演 地域のチカラを未来のチカラへ
- ・ 編集後記

活動報告

お正月の小物づくり



十二月二十二日午後一時から、『すまいる宮の前』で「お正月飾りづくり」を施設の利用者さんで行いました。1時間半くらいで個性あふれる正月飾りが完成しました。お互いの作品を誉めあう暖かい時間を過ごすことができました。きつと良いお正月を迎えていただけたことと思います。始まる前に施設の責任者の方から「参加者は三人で中には認知症の方も居るのですが…」といわれました。しかし、一番早く、しかも立体的な作品を作られていたのが施設利用者さんでした。これまででは施設の方たちだけで作っていましたが、今回は地域の人たちと一緒に「行えたことがとても良かったと思います。責任者の方も「楽しかった。」と言われていましたし認知症になつたら何もできなくなるという思い込みが一般にあります。一緒に作業した人にはそうではないということがよく分かったのではないかと思います。」

感想 「お正月の小物づくり」

に参加して

吉津 みどり

冬が来たけど、まだ「正月が来る」という気分にはなっていないかった時に、友から届いた案内ちらしを見て、「正月飾り」と言えば、干支の馬の親子を色紙に貼っているのをイメージしていましたが、扇形に盛花の写真が添付してあって、この作品なら、ずっと飾って置ける、とすぐに参加を決めました。

十二月二十二日午後一時から木之庄町の『すまいる宮の前』（養護サービスクラス付き高齢者住宅）で在住の方とも一緒にお正月の小物づくりを習った。みんな同じ材料で、「自分の思うように並べてみてください！」と、言われても初めは不安だった。

同じ机に並んでいた年配の男性は「やったことがない！」「わからない！」「どうしたらいいんだ！」と散々悩まれておられたのに誰よりも早く出来て、仕上がったのを、みんなに「ワー！じょうず。」「きれいにできたねー！」と言われたら、すっかり自信を持ち、見学に出て来られた友だちに「見てみて！」と言って説明をされているのを見て、「あれほど悩まれていたのに人が変わったね！」「今日はよく眠れるよ！」と、みんなに言われながら、とてもいい顔で居られるのを見た私たちにも自信が移ったのか、次々に個性的な作品が出来上がってきていた。

みんなの作品の中に飾りの水引を立体的に立てて有るのを見て、底に沈み込んでいる私のも「少し立てればよかったな！」と思っていたら、「水引は、引き上げれば起きてきますので、後でも立てることが出来ますよ！」と習って、すぐに引き起こしてみた。平面から立体になり、水引の特性も勉強でき、初めて出会う人たちとも出来上がった作品を見せ合いながら一緒に喜び合え、自分のために参加したのにたくさんプレゼントをもらったような楽しい一日を過ごすことができ、有難うございました。スタッフの皆様、お疲れ様でした。



全部楽しかったよ！

第四回コミュニティカフェ仁伍

おしゃれを楽しむ

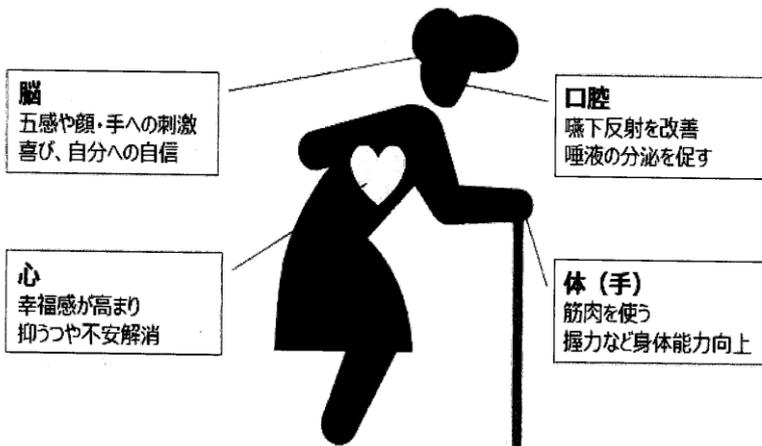
近年、『美容介護』とか『おばあちゃんのアッショーンショー』などと、「高齢者」と「おしゃれ」を結びつけた言葉をよく耳にするようになりました。そこで1月8日に『おしゃれを楽しむ』という講座を持ちました。

「こうした風潮はなぜ起きたのか？」と考えてみると、衣服全般が社会化したことではないかと思えます。我々人類はつい数十年前までは、糸を作り(飼育・栽培した蚕や綿・麻から)、布を織り、それを衣服に縫って着用していました。ところが最近では、日本や海外で大量生産された衣服を、商店から購入することが多くなりました。それにより、衣服の世界でも、高齢者や障がい者の衣服が心身に及ぼす影響等も考えられるようになったとも考えられます。

衣服に関する研究を報告する『日本衣服学会誌』を見てみると、21世紀に入った2001年の「誰もが楽しめるファッション市場」という特別講演を皮切りに、学会誌では次のような特集記事が組まれていました。『高齢者と衣服』『衣服力で障がい者も元気に』『高齢者の生活支援としての衣服』『おしゃれで輝くファッションの魅力』『ユニバーサルデザインと被服く新しいアイデアを生む障害者支援』『多様な人を対象とするこれからの衣生活教育とユニバーサルファッション』など。

たとえ障害を持っていても、高齢になってもおしゃれを楽しむという時代を迎えていることが分かります。

こうした流れを受けて、『「おしゃれ」を楽しむ』という企画を実施しました。講座内容は、これまで会員の方から送っていただいたいの洋服の中から、自分に合う服を探して身につけたり、ネットカチーフの結び方などをこれまで女性用衣服の販売に携わってきた人のアドバイスを受けました。最期に事務局から、化粧やおしゃれが我々の体下次の図のような影響を与えている事を報告しました。



感想 「おしゃれを楽しむ」に参加して 土肥 多恵

一月のテーマは「おしゃれを楽しむ」でした。私は元々ラフな格好を好み、仕事でも黒、紺、茶系を着ていましたので、いわゆる「おしゃれ」にはあまり縁のない生活をしてきたように思います。カフェの案内を頂いた時「アドバイスをもらいたい服や小物」とあり、頭に浮かんだのが一枚のロングスカーフでした。鮮やかなオレンジ色、両端にはスパンコールが付いてとてもきれいなのですが、どんなふうに着こなしてよいのかわからず、しばらく悩んで「タンズ行き」となっていたのです。今思い切つてそれを持って行くことにしました。自己紹介の時にその話をしたところ、百貨店で長く洋服の販売をされておられた方が「スカーフの真ん中に結び目を作って、そこに両端をくぐらせれば良いですよ」と、実際に私の首元に巻いて教えてくださいました。すると、結び目を通した両端がちよと蝶々の羽のようになり、スパンコールもキラキラしてとても可愛いのです。「これなら私にもできそう」と思えてきました。他の参加者の方もいろいろな洋服を試しておられ、楽しいひと時でした。「おしゃれをしたりお化粧をしたりすると気持ち前向きになる」というお話を聞きましたが、確かにその通りだと実感しました。



暖かくなったらこのスカーフを巻いてお出かけしようと思っています。今までは違ったタイプの服にもチャレンジしてみようかなとも。良い機会を作ってください、ありがとうございます。

### 第五回「コミュニティカフェ仁伍 味噌づくり」

「第五回」コミュニティカフェ仁伍を開催しました。テーマは「味噌づくり」。昨年は20名以上の参加となり味噌づくりを体験できない人が出ました。そこで今回は定員10名で実施する予定でしたが、14名の参加で行いました。

手を洗った後ゴム手袋をはめて、2グループに分かれて豆つぶしにかかりました。今年の豆は少し煮る時間が短かったのか？少し硬めだったのか？豆の煮汁が少し多く入って柔らかく目で心配でしたが皆さん平素の不満をぶつけるように気持ちよく容器に投げ込みました。

その後、お互いにお喋りしながらスタッフ作成の豚汁とおにぎりで昼食を取りました。最後に1人ずつ今日の感想を言ってもらおうと

- ・ 子供の時、隣近所の人にあげようと味噌をたくさん作っていたのが懐かしい。
- ・ 本物を作るのは時間がかかるが満足でした。



### 感想 「味噌づくり」に参加して

塚本 弥永子

私は今回初めて味噌づくりに参加させてもらいました。初めはどんな作業をするのか少し緊張していましたが、スタッフの方も、明るく、気さくな方ばかりで安心しました。参加者の方達が、昔はみんな家庭で味噌を作ってたんだよ！と言われたのがとても印象的でした。最後に潰した大豆の玉をみんなで樽にぶち投げるのがとても楽しかったです。味噌づくりが終わり、去年の味噌で作ったみそ汁とおにぎりを頂きました。野菜ゴロゴロのおみそ汁がとても美味しかったです。おみそ汁を食べながら来年もおいしく出来上がっているといいなと思いました。

おみそ汁とおにぎりご馳走様でした。ありがとうございました。



ケアを通じた贈り物

レベッカ・ブラウン著 『体の贈り物』

牧田 幸文

福山におしゃれな本屋があると聞き、休日に足を運んだ。店内には、大型書店ではなかなか見かけない本がずらりと並び、思わず「ほお〜」と声が漏れる。感嘆しながら本棚を眺めていると、平台に積まれた『体の贈り物』が目にとまった。20年以上前に出版された作品だが、装いを新たに美しい新装版として生まれ変わっている。すでに英語版と日本語版の両方を持ち、何度も読み返してきた一冊だ。それでも、手に取ってページをぱらぱらとめくるうちに、著者と翻訳者である柴田元幸氏のサインを見つけ、気がつけばまた『体の贈り物』を購入していた。

本作は、劇的な事件が起こり、それが解決されて幸福へと収束するような物語ではない。語り手であるホームケアエイド（日本でいう居宅介護職員）の「私」と、ケアを受ける利用者たちとの日々のやり取りを通して、利用者一人ひとりの性格や生活に寄り添った支援の様子、そしてそこに満ちる感情が、淡々と描かれている。

主人公の「私」が所属する UCS は、Urban Community Service（都市コミュニティサービス）というエイズ患者専門のケア支援団体である。利用者のほとんどが同性愛者で、病状の特性から特別なケアを必要とする人々だった。本書が出版された1994年当時、エイズは依然として「同性愛者の病気」や「不治の病」とされ、強い恐怖と深刻な社会的偏見がまだあった。

病が進行し、死を間近に控えた人々の生活を支えるため、「私」はホームケアエイドとして各家を訪問する。本書には「私」と6人の利用者が登場し、それぞれの暮らしぶりや性格、交わされる言葉、そして周囲の環境に細やかに気を配りながらケアを行う様子が丁寧に綴られている。利用者のうち、リック、エド、カロス、キースは同性愛者であり、キースを除く多くは、すでにパートナーや友人を看取る経験をしている。そのため、自身の体がどのような経過をたどるのかを知り、それを深く受け止めている。体の衰えと死を目前にし、ホスピス行きを拒んで苛立つ利用者の心情を、「私」は敏感に感じ取り、その思いを尊重しながら見守りとケアを続けていく。

とりわけ印象的なのは、ほとんどの利用者に慈しみと親しみをもってケアする「私」が、キースに對してのみ、その身体的な様子を「不気味」と表現している点である。「私」は、キースの全身にできた腫瘍に軟膏を塗るため触れなければならない恐怖を、率直で冷やかな言葉で語る。この冷やかな表現は、作品全体の穏やかな語り口の中では異質に際立っている。それは、エイズ患者の体に現れる症状の強烈さと、キースがアフリカで感染したとされる病への「不気味さ」に対する、当時の社会的まなざしを映し出しているようにも読める。この視線は「私」個人の感情というより、エイズがアフリカから広がった未知で恐ろしい病として認識されていた当時の一般的な感覚を象徴しているのだろう。それほどまでにエイズは恐れられ、罹患した人たちは深刻な差別と偏見にさらされていたのである。

ケア利用者の中には、唯一同性愛者ではなく、手術時の輸血によってエイズを発症したコーニーという女性がいる。彼女は、同性愛者たちとは対照的に、郊外で暮らすごく普通の専業主婦である。「私」はコーニーのケアにおいて、料理や洗濯といった家事を行う際には必ず彼女の意見や様子に目を配り、やり方を尋ねながら、常にコーニーの指示に従って作業を進める。それは、主婦が長年誇りをもって担ってきた仕事への細やかな配慮であり、コーニーが主婦として大切にしてきた価値観を理解し、尊重するケアのあり方であった。さらにコーニーは、「家族の誰かが世話をしに戻ってくる」という提案を頑なに拒み、「みんなそれぞれ自分の生活があるから」と語りながら、病とともに生きる自立心を貫く。物語はコーニーの最期を、息子とその恋人、「私」が静かに見送るところで終わる。

悲しい物語ではあるが、各章の題名にある「の贈り物」というギフトは、一方的に与えられるものではなく、互いに受け取り合う気持ちの意味している。主人公の「私」も、そしてこの本を読む私たち読者もまた、何か大切な贈り物を受け取ったような気持ちになる。レベッカ・ブラウンは、作家としてデビューするまで長年ホームケアエイドとして働いてきた。その経験に裏打ちされた、人の感情の機微を深く理解した表現が、本書の随所にちりばめられている。英語でも読みやすい作品だが、日本語訳もまた見事で、何度でも読み返したくなる一冊である。

レベッカ・ブラウン著 柴田元幸訳『体の贈り物』

twilight 出版、2025年

新聞報道から見る「孤独・孤立対策」

加納 三千子

1. はじめに～高齢者の置かれている状況～

1月16日の毎日新聞の『受け身』にならずチエックを『につづいて』『終身サポート』注意点・弁護士に聞く』という見出しが目につきました。

2004年度の高齢社会白書によると、2022年度の単独高齢者世帯(一人暮らし)は31.8%となっており、すなわち3人に1人の高齢者は一人暮らしだと言っています。

沢村香苗は『老後ひとり難民』『幻冬舎書院、2024』のなかで、人生の終末期に向けて、次のような問題が起きてくると述べています。

- すなわち①自立した生活を営む ↓ ②家事などの日常生活の行為が難しくなる ↓ ③入院し、重大な医療処置を受ける ↓ ④さらに心身の機能が低下し、サービスや住む場所を見直す ↓ ⑤死後事務に関する意向表明と手続き等。

右記のようなことに関する諸手続は、これまでの社会では家族がフォローするもの、と考えていました。しかし、一人暮らしが増え、しかも家族の数が少なくなってきた今日では、死を迎える本人自身が上記のようなことを考えなくてはならない時代になっているのです。したがって井上治代は『おひとりさま時代の死に方』(講談社α新書、2025)で、介護保険制度のような「死後福祉制度」を設ける必要があると述べ、死後のことを行ってもらうとする人に「生前契約」をしておくことを勧めています。

2. 高齢者等終身サポート事業とは？

身寄りのない高齢者が増えている課題についての国会質問から2024年4月に『孤独・孤立対策推進法』が成立しました。

たとえば入院や転院、マンションの購入・入居、高齢者施設への入居等には身元を保証する人が必要になることが多くなっています。

そうした中で、身寄りのない高齢者が死後の段取りを本人に代わって行う事業者が増えてきています。福山市にも出来ています。しかし、この事業者をめぐって、倒産をはじめとするさまざまなトラブルが生じています。

そこで、その問題点を総務省が『身元保証等高齢者サポート事業における消費者保護の推進に関する調査』を行って、2023年8月に報告していました。その調査結果を基に、消費者庁、総務省、法務省、厚生労働省、等が共同で『高齢者等終身サポート事業者ガイドライン』を出していました。その最後にはそうした事業者を利用する際の「チェックリスト」が掲載されています。こうした事業所を利用する際には、このチェックリストが役立つのではないかと思います。(ニュース末に添付あり)

3. トラブルから身を守るために

新聞記事では、トラブルから身を守るためにはまず、チェックリストの存在を知ることの大切さを述べています。

また、厚生労働省も、身寄りのない高齢者の死後事務や日常支援などを新事業とする考えを持っていると言います。ただし、経済状態で考えるように「資力の乏しい人に配慮するが火葬は実費に

なる」と言うことです。

しかし、記事の中で弁護士は「そうしたことは社会全体で考えるべき」であり、「公的な窓口で高齢者が助言を得られる環境整備が必要」だとも述べています。

4. 福山市の現状は？

毎日新聞に、記事にある「公的機関とは？」と聞くと、「県や市の担当課」でしょうね、との返事であった。そこで、市役所に、「高齢者の相談に乗るところにつないで」というと、「高齢者支援課」につながりました。「高齢者の相談に乗ってもらえるところとは？」と聞くと、「民生委員が行っています」とのこと。

そこで、2024年に成立した『孤独・孤立対策推進法』の2025年度の事業では、福山市が記載されていました。で、そのことを述べて「福山市は、どのような孤独・孤立対策を行っているのか？」ときくと、はじめは「その様なことはしていない」の一点張りでした。しかし、しばらくして「検討はしているが、まだ外部に出す段階ではありません」と言われましました。

ただし、企画政策課の方に聞いたときは、「2025年度 地域活動の助成・支援制度の概要一覧」の表を送っていただきました。これまでも行われていた事業なので、なぜこれが『孤独・孤立対策推進法』にかかわる事業なのか分かりませんでした。電話の対応を含めて、なぜ市民にきちんとその事

業にどのような対応がなされているのかの説明をしてももらえないのかと、思いましたし、市民のための事業を検討するのに、なぜその様に秘密にされなければならぬのかと疑問に感じたことでした。現在市役所が企画していることは、そんなに秘密にしなければならぬ事を考えているのかな?とも思います。

なお、東広島市と三原市では、もし何かあったときの連絡先を記入したエンディングノートのようなものを市役所に提出しておく、明治32年に制定された「行旅病人および行旅死亡人取扱法」に よらない処理がしてもらえる制度を作成しているの! !

**講演「地域の千カラを  
未来の千カラへ」を聞いて  
遠藤 教子**

12月8日に尾道福祉会館で、鞆の浦で介護福祉事業所「鞆の浦さくらホーム」を運営されている羽田富美江さんの講演会を聞きに行きました。

会場では講演前から鞆の浦の街並みと高齢者が町を歩かれている様子などを映像で流されました。これを見て以前、他県から来た友人を鞆に案内した時のことを思い出しました。住民から声をかけ、鞆の風景を説明していただき、親切な方がいらつしやる所だという印象がありました。しかも訪れた度ごとに暖かく迎えられているような気がした経験があります。「さくらホーム」の利用者も施設から出て街を歩いた時にはそんな地域の方々に見守られている姿が想像できました。

けれども「さくらホーム」が施設を始められた頃(2004)は高齢者に対する考え方は今と違い、自宅が家族が介護するのが当然という考え方が主流でした。認知症についても理解されていない事が多かったようです。

これらの事は今でもいろんな考え方があり、認知症についてはなお更だと思えます。認知症の方の行動にも各々理由があり、心が満たされた状態であると奇行(徘徊・万引き等)はなくなると話されました。また、さくらホームでの高齢者と家族の関係も紹介されました。地域で見守られながら一人でも生活されている方を離れて暮らしている子どもさんが、鞆から自分の住まれている方によりよせられた事(老人介護施設に入居されたらう)などです。このことについて羽田さんは気にかけておられました。

認知症になると何にもできなくなるのではなく、だんだんと年齢を重ねると身体、気力も衰え物事を理解するのにも時間が必要という事です。全ての地域で高齢者が自立して支えあって暮らすことができるようになるという、と改めて思いました。



**編集後記**



冬の手仕事 味噌づくり

おしゃべりしながら

味噌玉を

樽に投げ入れ

ランチタイム

胃腸も快調

もうすぐ春です!



**NPOへのお便り募集!**



「ミルネへのお便りを募集します。」「感想」「意見などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。」

**問い合わせ・申込先**

NPO法人コミュニティルネッサンス研究所  
電話・FAX: 084-917-5937  
メール: h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp